



ブリュージュルの「子供の遊戯」 9

——「私の青い塔の中に誰がいるの」から「泳いだ後で」まで——

森 洋子

56 私の青い塔の中に誰がいるの

Wie zit er in mijn blauwen Toren (図一)

ひとりの女の子を囲んで、地面の上に数人の子供たちがあたたかも彼女を守るように坐っている。一番手前の女の子の赤い服と白いエプロンは、頭上の青い布（エプロンか）と美しい色彩的なコントラストをなしている。この青い布は、立っている女の子がその端を、他の仲間が他の端を持っているが、実は塔を意味しているのである。

る。ド・マイヤーの研究^{注1}によると、この遊戯は、「誰がこの青い塔の中にいるの」「王様の王女さまだ」という会話で始まるという。すると鬼が周囲を歩きながら中の女の子を順番に連れ出し、最後に王女がひとり残される。女の子たちは彼女をめぐって踊りをし、王女の後継者を探し出す。

ハルトマンとレンズは子供たちの会話を次のように推定している。^{注2}

A 誰がこの高い塔の中にいるの。



図1 ブリュエール「私の青い塔の中に誰がいるの」(「子供の遊戯」の部分⑤)

B 王様の王女さまだよ。

A この子供たちは誰のもの。

B 私のもの。

A 私がそのひとりもらってもいい。

B だめよ。

A じゃあ、私が塔の周りを三回廻って、

侍女の頭を切り取るう。そしたら娘ひとりが

私と一緒にいくべきよ。

ピフ、ペフ、パフ、

頭を切ってしまえ。

それから青い布をもっていた子供Cがそれを引っぱり、輪の真中の子供を押し倒す。すると他の子供たちはワァーといって夢中で逃げ出す。Cが彼らを追いかける。一番最初に掴まった子供が今度は高い塔の中に坐らせられる、というのがこのゲームのルールである。

ヒルズはこのグループの中で、右側に坐っている二人の男の子は *Maidelschnecker* といって女の子の遊びを邪魔する人間(直訳は女の子を味見する人)の役をしていると述べている。^{注3} さらにヒルズは古くからあるドイツの遊び「お母さん、お母さん、貴方の子供はどこに行っただか」を適用させる。他方、グリムがその兄弟宛に書いた手紙を引用しながら、こう解釈する。つまり女の子たちはある母親から子羊(一番年下の子供)を買い、青い布にくるんで持ち運ぼうとする時の会話である。母親は答えて曰く。「私は貴女に昨日、ひとりの子をあげま

した。一昨日もあげました。毎日あげられません。」こういったながらも、ついに最後の子供も二人の女の子に売られる。そこで女の子たちは「ああ、お母さん、お母さん。子供はどこにいったの、蛇やひき蛙があの子を食べってしまった」とはやし立てる。するとその母は立ち上がり、子供を探す。探し終ったら、遊戯は終りとなる。

57 ガラガラ遊び Het Klepbord (図2)

赤い柵の横を、小さな女の子がガラガラを鳴らしながら歩いていく。この玩具は長方形の板の真中の穴に棒を入れ、その棒先にハンマーを紐で固着して作る。板の下の把手を持って前後に振ると、上のハンマーは上下に動



図2 ブリュージェル
「ガラガラ遊び」
('子供の遊戯'の部
分⑤)

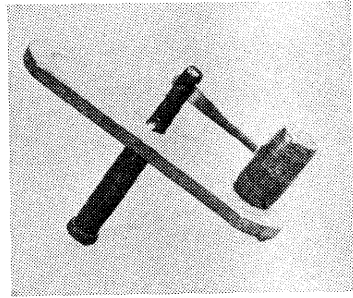


図3 「ガラガラ」木製31.5×8.5cm 19世紀

彩飾にこの玩具で遊ぶ子供がみられる(図4)。

ブリュージェルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」では、四旬節側の擬人像の前後に、六人の子供がこの遊びに興じている(図5)。この子供たちがなぜ大騒ぎをする謝肉祭側ではなく、禁欲の四旬節側にみられるのかは、つぎに説明するこの玩具の実用性からうなずけよう。教会では復活祭前の聖木曜日(ミサ)で、司祭が「天のいと高き所には神の栄光あり」と唱えると、鈴が賑やかに鳴らされる。しかしそれ以後、三日後の復活祭の朝まで、ミサでの鐘や鈴の使用は禁じられる。そのため、ヨーロッパの

き、板の左右両側にカタカタという音をたてる。紐の代わりには後代では蝶番を使用することもあった(図3)。なお十六世紀前期のフランドルの時



図4 シモン・ベニング(?)「ガラガラ遊び」(『時禱書』) 3月の部分 16世紀前半
ミュンヘン バイエルン州立図書館

しながら知らせたのであった。また夜番が町や村が安全かどうか見廻りをしながら、このガラガラを鳴らしたといわれる(図6)。夜番を画いた版画に、こう書かれて

子供たちは三日間、教会の鐘や鈴がローマの教皇のもとに旅をしている、そして復活祭の朝、羽根の生えた鐘や鈴たちがチヨコレートや砂糖でできた卵や兎を運びながら、帰ってくるという伝説を信じていた。こうして鐘や鈴の沈黙する三日間、ミサでは代わりにこのガラガラが使われたのである。とくにミサを始めるとき、ミサ答え(侍者)は村道をガラガラを鳴ら



図5 ブリュエゲル「ガラガラを鳴らす子供たち」(『謝肉祭と四旬節の喧嘩』の部分) 油彩 1559年

いる。
「愛するガラガラ鳴らしさんよ、しっかり見廻ってくれ、私は眠りに行く。おやすみなさい、神様、彼に祝福たまわんことを、夜番に風や雨のないように。」
さらに十九世紀の版画(図7)に、子供がガラガラをもつて町を歩く情景があり、そこにもこう歌われている。



図7「ガラガラで遊ぶ子供」(「子供の版画」の部分)版画、ヘメレールス・ヴァン・ハウテル発行、スハールベーク (1827~1894) ベルギー



図6「ガラガラ鳴らし」(「子供の版画」の部分)版画、ブレボルスとディルクス・ゾーン発行、トルンハウト (1820~1845) ベルギー

二人の子供が互いに向きあって、風車を脇の下にかかえ、槍合戦ごっこを開始しようとしている。子供たちは裾までの洋服を着ているが、多分男の子であろう。向かって右側の子供はすでに歩を進め、攻撃的である。それに対し、相手の子供はまだ立ち止まったままで、防禦的である。この風車は当時すでに二枚と四枚羽根があったらしく、ブリュッゲルよりも一世紀前の、ヒエロニムス・ボスの祭壇画には二枚羽根のものが見出される。それは十五世紀末に制作された「十字架を担うキリスト」の

「ドリスよ、君はガラガラと遊んでいる。一体何時に
なったのか。(ドリス) まだ十時になっていないよ。
わたしは遊び廻るの。わたしにとって時間があまり
長すぎないように。」
なお今日でも、リンブルグ州のトルンではこのガラガラ
が聖木曜から復活祭までの三日間、ミサ開始の告示に
使われるという。

58 風車かたむねまの槍合戦 *Tournooren met moelentje*

(図8)

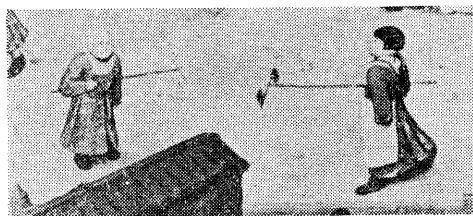


図8 ブリュエゲル「風車で槍合戦」(「子供の遊戯」の部分⑧)



図9 ヒエロニムス・ボス「風車と歩行器をもつ幼児キリスト」(「十字架を担うキリスト」の裏面) 油彩 15世紀末

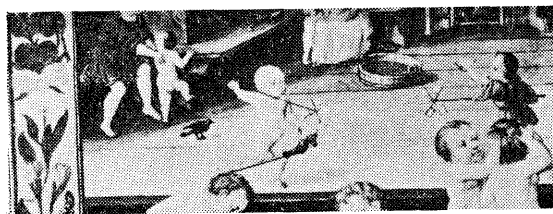


図10 「風車で遊ぶ子供」(『太陽の光輝』のドイツの彩飾写本の部分) 1582年

裏面に、左手で歩行器を、右手で風車をもつ幼児イエスの姿(図9)である。また十六世紀後半のドイツの写本では、二枚と四枚羽根の両種類の風車がみられる。(図10)。風車を回すときは、棒を水平にして風にむかって走らねばならない。なお十六世紀の版画(図11)やタイル画(図12)でも、二、四、七枚など種々の数の羽根の風車があり、ジャック・ステラの本の挿図では、二枚と四枚の風車が同時にみられる(図13)。

ここでは槍合戦というよりは、玩具としての風車に注目してみよう。というのは子供たちの持ち方からして、羽根を回すことにも関心を抱いているからである。十七世紀のヤコブス・カッツ(一五七七—一六六〇年)は「風車」について、こう寓意的な詩を書いている。「あそこに風車をもっている子供がいる。



図12 「風車ごっこ」オランダのタイル画
17世紀後半（図11にもとづく）

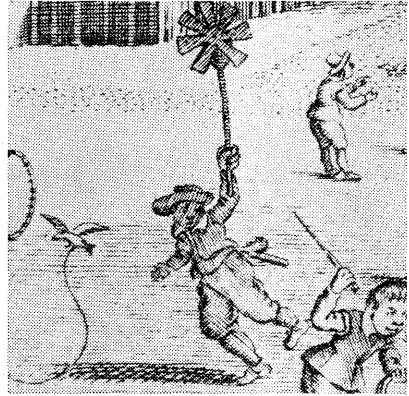


図11 E. シリマン「風車ごっこ」（カッツ
『結婚について』1642年より）銅版画

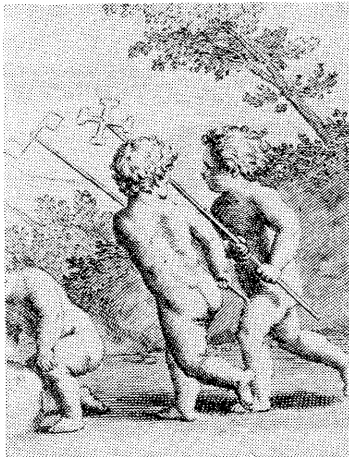


図13 クローディン・ブゾネ・ステラ「風
車ごっこ」（ジャック・ステラ『子供の遊戯
と楽しみ』1657年よりの「ピンごっこ」の
部分）銅版画

い、つねに動揺して
いる愚かな人間の比
喩に使われている。
十七世紀の画家で詩
人であったアドリア
ン・ド・ヴェンネも
カッツと同じく、こ
う歌っている。

みてごらん、どんな風に道の上を跳んでるか。
ある時は冷たい風、ある時は微風に出会ったり、
ある時は強い風が吹いたり、
風車はそのためぐるぐる回る。
多くのひとはその中に風車をもっている。
だが誰もがそれに気がつかない、
それはくるくる回るようにできている、
ひとはくるくる回ることができずまで、
求めている。^{注4}

なおカッツのフランス語版の詩での風車は静寂さを失

「われわれのひとりがかう云う。

彼は『風車に当たったのだ』と。だがやめてくれ。すべての人間が迷っているのだから。何処で誰を引張ってきても、私はうけ合うよ。その人は馬鹿気たことをするか、ぶつぶつ文句を云うか、だらだらと嘆いているか、のどちらかである。」

ここで「風車に当る」een slaghe van de Molen というのは、頭が風車の長い羽根に当たったため、馬鹿になる、という成句なのである。

なお、ストウートの『ネーデルランドの諺、云い廻し、成句』の中でも、「風車をもって走る」Hij loopt met molentjes につきのような説明を与えている。^{注5}すなわち「彼は頭が変だ」「彼は風車に当たってしまった」という意味で、十六世紀末の例としてはオランダの劇作家ブレデロの用語に、「君の頭は風車のように動く、頭の病気なのか」（一五九〇年）がある。^{注6}また『やもめと偽わる男と祭りで欺まされた女の子』^{注7}には、「ワインは私が考えていたよりも強く、私の頭を全く狂わせ、風車をもって

走らせる」という用例が見出される。「十九世紀に編纂されたハレボメの『ネーデルランドの諺事典』^{注8}には「彼は頭に風車をもっている」Hij heeft een molentje in het hoofd は「彼は阿呆だ」Hij is gek の意味として説明されている。また一六四四年にオランダ語に翻訳されたチェーザレ・リーパの『イコノロジア』（伊語初版一五九三年）でも、「愚かさ、狂気」についてこう叙述されている。^{注9}「だらしなく衣服をつけている婦人で、誰かが持っている風車をみて笑っている。子供たちはその人と走り回り、風車は風でくるくる回る。」さらにリーパは「愚かさ、狂気」の男性の擬人像について、長い黒い衣服を着た老人は、笑いながら、籐製ステッキを棒馬とし、右手に風車をもっている。子供たちはその風車で遊ぶのを楽しみとしている。老人は一生懸命風車を風の中でくるくる回す。」

以上、少し詳しく述べたが、「風車を回す」というのはたんなる遊戯だけではなく、ヨーロッパでは阿呆や愚者の寓意としてみなされていたのだった。

59 穴掘り Put graven (図14)

小さな砂山で三人の子供が遊んでいる(59、60、61)。59の穴掘りは独り遊びで、この子供はおそらくトンネルを作っているのだろうか。

60 砂山から駆け登る Op den Zandberg loopen (図14)

61 砂山へ駆け降りる Den Zandberg afloopen (図14)



図14 ブリュエゲル「穴掘り」「砂山から駆け登る」「砂山から駆け降りる」(「子供の遊戯」の部分⑤⑥⑦)

ド・マイヤーの分類では60と61に分けられているが、

おそらく二人で同じ遊戯をしているのだろう。グリュック

クは「城遊び、この山は僕のもの」Burgspiel, de berg

is mijn、ヒルズは「ねえ、僕は君の丸太小屋の上だ。

山は僕のもの」Man, man, ik ben op je blokhuus; de

berg is mijn と呼称している。筆者にも60と61は組に

なった遊戯のように思われる。つまりわが国でも「お山

の大将われひとり、後からくる者つき落せ」というかけ

声があるが、ここでも砂上に立った者が王様で、彼は

「この山は余のもの」と宣言する。すると他の子供が王

様を追い出そうとして駆け登る。ドローストは十七世紀

のこの遊びの歌を見出した。

「わたしの高い山、

どの位、わたしは山の上にいるだろうか。

七年と一日だ。

わたしは上にいる、お前は下に行け。」

ハイデン(一六三三年)はこの遊びについてこう説明

している。「少年は叫ぶ。『僕はブルックハルトだ。』僕は

ここに立っていて、敵を待っている。他の者たちはひとりが上に登って来るまで、見張って歩き廻る。世界もこれと同じこと。ひとりが成功すれば、他は失敗する。誰でも堆肥を守るのだ。強い者が来れば、他の者は行かねばならない。」

62 スカートを膨らませる

Boefien maken - Aaien en blaaien (図15)

三人の女の子がスカート遊びをしている。二人はすでにぐるぐる廻り(aaien || draaien)、立ったり、しゃがんだり(Draaien)して、スカートを大きく膨らませ、草の上に坐っている。第三の少女はまだぐるると廻りながら、スカートを翻している。ブリュージュルはとくにこの第三番目の女の子の動きに気を配っているようだ。この遊戯のオランダ語の呼称、“Aaien en blaaien”は民族学者のコックとテーリンクによるものだが、^{注14}“aaien”という言葉自体は「やさしくなでる」という意味で、この遊びにふさわしい意味とは思えないので、おそらく

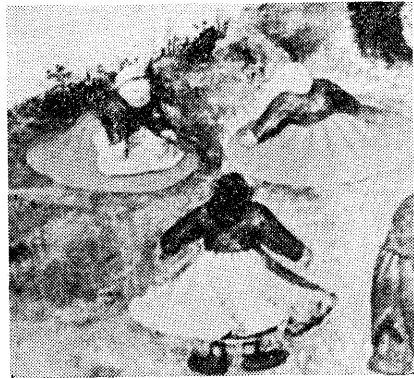


図15 ブリュージュルス「カートを膨らませる」
「(子供の遊戯)の部分©」

“draaien” (廻る)の幼児語が“aaien”となったのであろう。このほかこの遊戯は英語で“Turn, Cheeses, Turn” 仏語で“La cage à poulets” (鶏の

駕籠)と呼ばれるが、前者は円盤形のチーズ、後者は鶏を市場へ運ぶ昔の籠の形から連想されたのであろう。とくに十八世紀初期からフランスで流行した特別に広がったペチコートは panier (籠) とよばれたが、また庶民たちがこれを「鶏の籠」と呼んで揶揄したのである。

63 木登り Boomklimmen (図16)

丸帽をかぶったひとりの少年が一生懸命に木登りをし

ている。木登りは少年たちにとって春の楽しみのひとつだったが、それは鳥の巢の卵を奪うためだった。少年たちは色々な種類の鳥の卵を集め、卵黄を吸い出して、自分の持っていない卵の殻と交換し合うのであった。ヒルズは、ドイツでは昔から大市するとき、石鹼をつけて登りにくくした細い高

い棒で、木登り競争をした、と述べ、このブリュッゲルの子供も当時行なわれた競争の模倣をしているのではないかと推測している。^{注15}しかし木登りというのは、巢や卵を盗むという目的がなくても、ただ高いところに登って上から景色を眺める、ということ自体に楽しみがあるのではなからうか。またブリュッゲルの画いた樹には巢らしいものも見い出されない。

- 64 浮袋をもつて泳ぐ Zwemmen met de Blaas
 65 足を水に浸す Voetjes baden
 66 川辺で泳ぐ Zwemmen van den kant

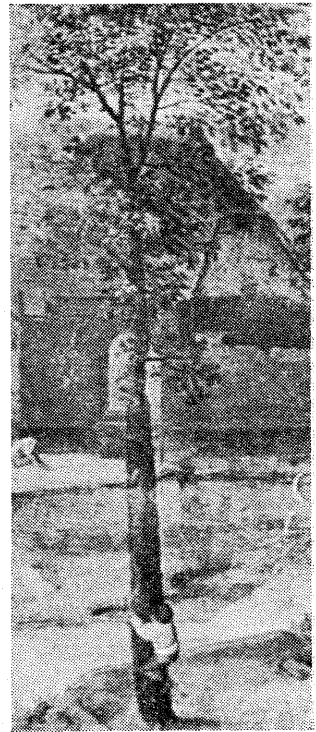


図16 ブリュッゲル「木登り」
 (「子供の遊戯」の部分)

67 泳いだ後 Na het Bad (64～67 図17)

画面の左上方に川があり、64の泳いでいる子供、65の岸辺に腰を下ろし、足だけ水に浸している子供、66のすでに肩まで水につかり、泳ごうとしている子供、67の泳いだ後で草原の上に坐り、服を着ている子供(グリュックは逆に泳ぎに行くため、服を脱いでいる、と推定)^{注16}などがみられる。いずれも今日のような水着を着ていないのは、十九世紀まで一般に水泳は裸のままだったからである。十七世紀の「子供のためのカレンダー」(図18)やタイトル画(図19)でも、子供たちはみな裸で泳いでいることが分かる。水泳はどの時代でももっともポピュラ

「なスポーツであったことは疑いのないことだが、ローレンハーゲン（一五九五年）はこう謳っている。

「若者たちは夏になると、

水や草原で喜びを求め、

学校で生徒たちがあひるのように、

泳いだり、水を浴びたり、

鶯鳥や白鳥のように上手に泳ぐように。」^{注17}

水泳が健康によい運動であるという認識は、過去、現在も同じだが、一八〇三年の版画カレンダーでは「川で

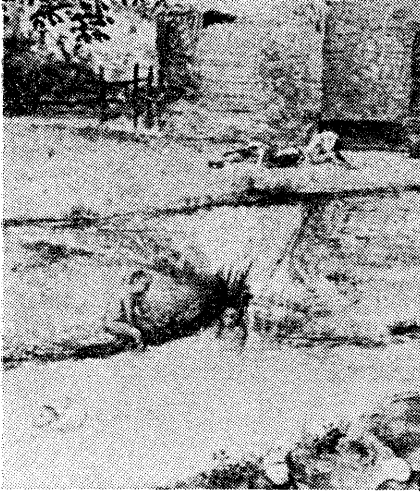


図17 ブリュエーゲル「水泳遊び」
（『子供の遊戯』の部分④⑤⑥⑦）

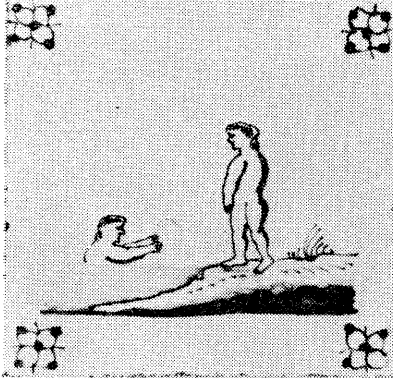


図19 「水泳ごっこ」オランダのタイル画
1885年頃



図18 「水泳遊び」（『子供のための
・版画カレンダー』）1803年以前

泳ぐこと、それは人間の健康にとって良いことだ」と記されていた。

ところで64の男の子は背中に浮袋を背負っていたが、これは牛か豚の膀胱を使用しての。既述の26の子供（本誌一九八二年三月号参照）も豚の膀胱を風船として遊んでいた。ところが浮袋に頼って泳ぐ子供を寓意してフィッシュヤーはその『寓

「意人形」(一六一四年)の中で、「頼るのは悪いことだ」というモットーを与えている。挿図(図20)は浮袋が手



図21 「何かを知っている者はそれを役立てる」(フィッシャーの『寓意人形』1614年より) 銅版画

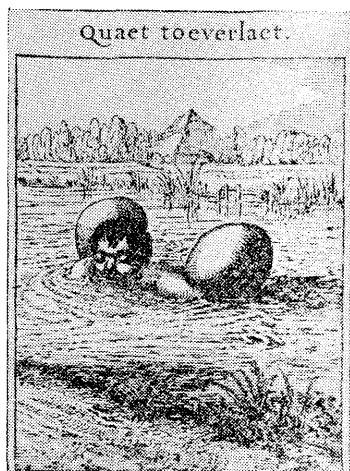


図20 「頼るのは悪いことだ」(フィッシャーの『寓意人形』1614年より) 銅版画

から離れそうになり、もがき苦しむ子供を表わしているが、そこにはこう歌われている。

「他からやって来るべき助力や援助に頼る人間は、弱い土台に家を建てると同じ。彼は丈夫な綱や大綱をもっているながら、家の屋根裏に置いて来た船長も同様で、必ず危険な目に遭う^{註18}だろう。」

フィッシャーのいう「弱い土台に家を建てる」はマタイ伝七章二十四節以下の「砂の上に家を建てた」愚かな行為に典拠している。しかし他方では、フィッシャーは自力で泳ぐ行為を賞讃し、「何かを知っている者は、それを役立てる」というモットーのもとで、川をすいすいと力強く泳ぐ少年の姿(図21)を与えている。添えられた詩にこう書かれている。

「自分の知識以外の何ものをも頼らずに、水の中を泳ぐ人間は以下のことを知らされる。何かを学んだ者にとつては、危急なときにはそれが助けとなる。知識は決して自分の主人を見捨てたりはしない^{註19}。」

つぎにジャック・ステラの詩(図22、一六五七年)を

紹介しよう。画面はすでに十人近くの子供たちが湖水の中で泳いだり、水を浴びたりしている。ひとりの子供が鼻をつまんで、ボートから飛び込もうとしている。

「皆は他の遊びで体が熱くなり、

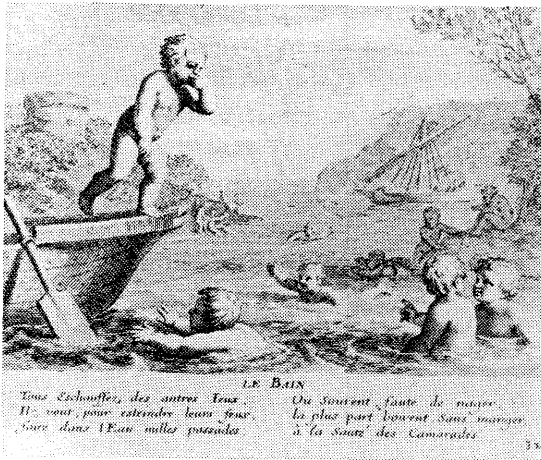


図22 クローディン・ブゾネ・ステラ「水泳ごっこ」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より) 銅版画

そのほてりを冷やすために、水中でもぐりごっこを何度もする。

もし時たま泳げないと、

金槌たちの大部分は「食事」もなしに、

仲間の健康を祝して「乾杯」することになる」^{注20}

ここで伝語の *Passades* を「もぐりごっこ」と訳した

が、この遊びは悪童たちが力づくで水の中へ相手の頭を押えつけて、自分の体の下を泳がせる遊びである。なお詩の後半は、泳げない者が沈んで水を飲んでしまう行為をユーモラスに表現しているのである。

「本連載をはじめて今回で九回目を迎えるが、91種類の子供の遊戯の約三分の二を終えた。そこでもう一度、ブリュージュの「子供の遊戯」のトレース(図23)を本誌に掲げるが、○内の番号は、各遊戯の番号に一致することを再度明記した
こゝ」

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspielen van Pieter Bruegel den*

Oude verkiand, Antwerpen 1941, p. 8.

注2 G. Hartmann en E. Lens, *Heté Jók!* Amsterdam 1976, p. 116.

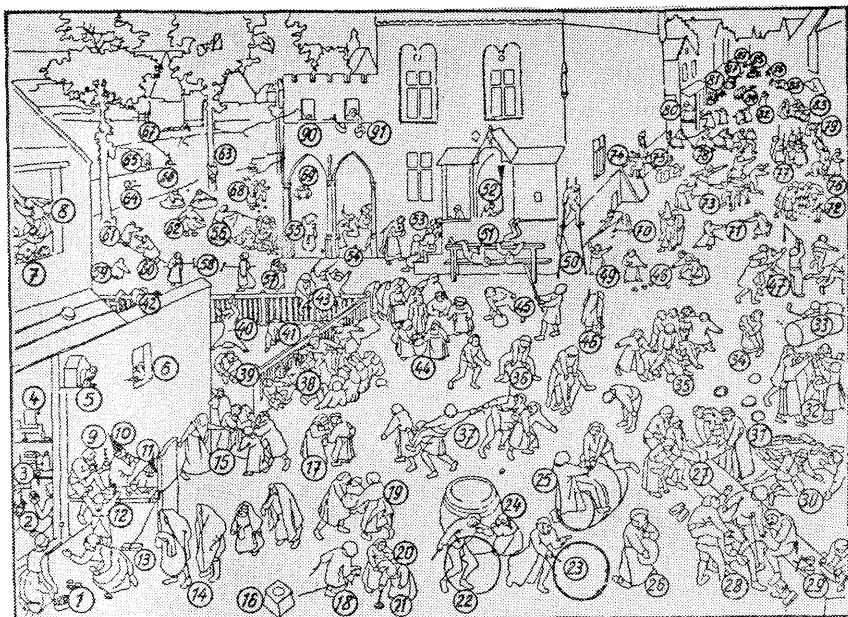


図23 ブリュエーゲル「子供の遊戯」(トレース, ド・マイヤー『子供の遊戯』1941年より, 注1参照)

- 註 9 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspel 1560*, Wien 1957, pp. 39-40.
- 註 4 Jacob Cats, *Kinderspel*, Saint-Omer 1855, pp. 82-84. (トランス)
- 註 10 F.A. Stoett, *Nederlandse Spreekwoorden, Spreekwijzen, Utdrukkingen en Gezeden*, vol. 2, pp. 37-38.
- 註 9 G.A. Brederoo, *Moortje 1590. (De werken van G.A. Brederoo, Amsterdam 1887).*
- 註 7 *De Gewaande Weuenaar met het Badroge Kernis-Kind*, vol. III, p. 48.
- 註 10 P.J. Harrebomée, *Spreekwoordenboek der Nederlandse taal of verzameling van Nederlandsche spreekwoorden en spreekwoordelijke uitdrukkingen van vroegeren en lateren tijd door P.J. Harrebomée*, I, p. 327.
- 註 9 C. Ripa, *Iconologia of aybeeldinghe des verstands*, 1644 (reprint, Soest 1971), p. 479.
- 註 10 De Meyere, *op. cit.*, p. 9.
- 註 10 G. Glück, *Das grosse Bruegel-Werk*, Wien 1955, p. 55.
- 註 11 Hills, *op. cit.*, p. 38.
- 註 12 W.P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel vóór de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden 1914, p. 41.
- 註 13 A. De Cock en Is. Reinheck, *Kinderspelen en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. I, p. 207 ff.
- 註 14 Hills, *op. cit.*, p. 39.
- 註 15 Glück, *op. cit.*, p. 56.
- 註 16 Rollenhagen 卷四十五, J. Balte, *Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele* (Z. d. V. f. V.), Bd. XIX, 1909, p. 389
- 註 17 同書。
- 註 18 Roemer Visseher, *Zinne-poppen*, Amsterdam 1614, *Profijt-lijfe Vermaak*(Utrecht/Antwerpen 1968), pp. 112-113.
- 註 19 Visseher, *ibid.*, p. 122.
- 註 20 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 32.

(東京工業大学)